

Title	聖書、祈り、愛
Author(s)	松原, 望
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume27, 2012.3 : 159-184
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3902
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

聖書、祈り、愛

松原 望

聖学院大学はキリスト教教育を核とする教育機関として「キリスト教関連科目」を五〇科目近く開設している。そのうちの 하나가「キリスト教と社会科学」である。担当する者として、この科目の授業報告と課題を述べたい。

「キリスト教と社会科学」授業報告

そもそも「キリスト教」とは、どのような教えであろうか。「聖書を読むことと、祈ることと、人を愛すること、これ以外は機(器)械体操のようなものだ」。熊野義孝先生が亡くなる直前に信徒のために残された味のあることばである。聖書を読むこと、人を愛することの大切さは、大学の授業の場、ことに本学であればなおのこと、格別に学生に伝えるに意義深いことであり、牧師やチャプレンの先生方にはもちろん遠く及ばないが、平信徒が自分の専門を気にすることなく熱意を傾けてもよさそうなことである。

私の専門はもとほ数理科学、現在は社会調査論、統計学なので「社会科学」は全く無縁とはいえないが、「キリス

ト教とく」となれば五里霧中、全くその資格はない。とはいえ、「キリスト教科目」はあまり資格は問わないだろうからお引き受けすることとした。といっても、さしあたりは「キリスト教」という「宗教」の話をすればすむのか、それでは的を外したことになるのではないかと考えたり、さらに「社会」とは「科学」とは、と進むにつれ、徐々に追いつめられた気分になる。ここはむしろ平信徒として、信じ考え感じていることを、学生に伝える素直な道をとることとした。

『ナザレのイエス』

始めてみるとやはり難しい。熊野先生が一信徒（大学教授）に「哲学は無邪気だからまだうらやましい。神学というのは芯から意地の悪い学問ですよ」といわれた意味深長なことばの片隅に触れた気がする。学問は体系立っているから話すに楽であり、多少の快感さえある。ところが聞き手からは難行苦行、それを通り越すと退屈になる。信仰の話は相手に感銘を与える心理上の効果はあるが、それは信仰のめざすところではなく、かえって、躓きの元にもなる。淡々と理路整然と話せば、聖書の歴史解釈といういま一つの躓きの危さもある。ではどこに全うな針路をとればよいだろうか。

そこで、「キリスト教と社会科学」では、聖書の時代は現代でもあるというテーマで、ここでは言葉よりは試みとして視覚によるとして、映画作品『ナザレのイエス』（CD）を觀賞し、適宜適切な範囲内で科目名にふさわしい最小限のコメントを加えることとした。どのような意味で「ふさわしい」かは追って述べることにし、最小限といったのは、聖書の各所（CDではテーマの区切り）に対する正統的な正しい知識を初めての人々に与える目的ではな

く、ただことばの共有にとどめその意味づけは各自に任せるというためである。つまり、ただ名辞を紹介し、そこに何を見出すか、その意味（内包）は求める人次第とする。とはいえ、そこは実際には難しく、多くの牧師先生や神学の先生が信徒の牧会のために説くところから類推せざるをえなかった。映画にはナレーションがなく、私の付した解説メモの紹介が以下に続くこの拙文である。なお、この作品を選んだ大きな理由はない。従来より、The greatest story ever toldとか The King of Kings などの名作品もあるが、キリスト教センターのご便宜によって貸出可能だったのが本作品である。

イエス・キリストは社会の裁断者ではない

「キリスト教と社会科学」というが、キリスト教は社会や生活の問題にどのように関係するのであろうか。実は思ったほど答えは簡単ではない。

イエスは、聖書は富める青年への戒めとしてはつきりとまぎれない勧告をしている。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ 六・三三章）

つまり、社会に生きるための諸徳目のよき知恵、方法、知識であっても二次的以下で、必須ではない。

また、山上の説教で、

「空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしない」（同六・二六）

「だから、あすのことを思いわずらうな。……一日の苦労はその日一日だけで十分である」（同六・三四）

も、ねぎらいといったわりの満ちたことばである。なぜなら、分業（職業）が成り立ち、生産が生じ、そこから収入

がもたらされることは近代以降の話であり、人はほぼ全員が慢性失業状態、社会福祉などという有難いものはない。つまりすべての人が文字通りその日暮らし、そのようなときに「明日のことは心配するな」ということははねぎらいでないとするれば、無責任か冗談に聞こえたはずであるが、そうは聞こえず、人の心に沁みわたったのがイエスのことばだったのである。

イエスは、社会科学の象徴である「税」の問題でも、パリサイ派のわなを避けるため、あるいは反ローマ権力の熱心党との一線を画すためではあったが、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」（マタイ二二・二一）として、社会の問題にあるいは社会そのものに距離を置く冷淡さ——正しい冷淡さ——を示す。通貨は通貨高権たる国家権力のあらわれである。形の上では国家に従えとはいいが、国家は決して至高最高ではなく、最後は人は国家でなく神に属する。その意味では国家は無内容とされる。つまり、もっぱら後段が重要なのである。さらに、法の問題でも聖書はさらに決定的な裁断を示している。相続財産の問題で判断を求める人が来たとき、イエスは「だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立てたのか」（ルカ一二・一四）と、この場合は、拒否している。このことばは、単にお金が汚いというよりは、万事正しく公正な分配に解決を見出すことができず、争いやひいては戦争を繰り返す人間のおろかさを言外に含んでいて、ここでは、国家は無内容というよりはさらに進んで神に反する存在である。

神の国のメッセージ

ではキリスト教は社会に対し関心がなく、無欲で、清い心を持つことを勧める修練の教えとなるのだろうか。これも一方的見方である。それどころではなく、歴史においてキリスト教ほど社会の変革を成しえた社会的宗教は他

に見出すことはできない。キリスト教がなした秘蹟とは何なのであろうか。もし、イエスが当時の独立運動の「熱心党」の首領になっていたら、もしイエスが神のことはをひるがえし、十字架刑から助かったら、もしイエスの復活がなかったら、世界は人類は未だ当時のままの暗黒に閉ざされ、すべての人々が平等などという変わった教えの民主主義などこの宇宙のどこにもなかったであろう。これこそ奇蹟である。神のなされた業は大きい。

人がもし悔い改め、神を信じるにより救われるなら、地の国は「神の国」となる。これがイエスが最初に宣べた福音のメッセージである。しかし、「神の国」イコール社会ではなく、社会よりは広い。人が救われることによつてのみ社会が救われ逆ではない。これがキリスト教信仰の福音のメッセージの前提である。「良き社会」を作れば人は幸せになるということは、考え方の順序の本末が転倒している。

そこに信仰の心が見出す真理がある。考える内容、とならんで考える順序、が等しく重要であるという指摘は、数学者・哲学者パスカルが強調するところで、キリスト教信仰においても「肉の秩序」、「精神の秩序」、「神の秩序」という正しい順序で考えなければ真理を見出しえず、禍々まがしい内容を作り出す結果となる。

神のもとにない変革

聖書を読むと、もちろん、イエス・キリストに敵対した勢力にはパリサイ派を中心とする体制派既成宗教勢力があるが、読み落とせないのはイエスを異教徒ローマ帝国からの解放の政治的指導者と誤解し押し立てる「熱心党」の政治運動があったことである。パリサイ派の力だけでイエスを十字架刑にすることができたかどうか。できなかったとすれば、民衆のこの誤解から来る幻滅と離反が種になっていたのであろう。ここで、「民衆」とは人間全体であると考えなくてはならない。なぜなら、人類は今もって現在も神のいない変革を追い求めているらしいからで

ある。

キリストは統べ給う——現代人にも変わらない聖書

聖書を歴史的に過去において読むことは危うい。「二千年ほど前にユダヤ社会で起こったイエスの事跡」として現在から勝手な解釈を与えることになりかねないからである。聖書を各専門分野で歴史文献として読むことに全く意味がないとはいえないが、信仰的立場からは、聖書解釈の地平からキリスト教脱出した人々も少なくない。そういう人々にとっては、聖書自体、脱聖書の書である。

人は根本においては驚くほど変わっておらず、人に悩み苦しみを与えるもろもろのことがらの大筋はすでに聖書に表れている。だから現代人も聖書を読めるのである。聖書のさまざまな出来事、事件もそのまま現在でも起こっており、イエス・キリストは現在している（Christ regnat キリストは統べ給う）。今社会に生きる我々の社会生活の基本は、神に基づかない幸福はありえないという基準である。

場面解説——パートI

1 オープニング　これからイエス・キリストの生涯の偉大な物語が始まる。直接には「イエス・キリストの物語」とか、これと並ぶべき映画作品「かつて伝えられた最も偉大な物語」(The Greatest Story ever told)を内容とするが、この作品は簡潔に『ナザレのイエス』と名付けられている。今日ではこのタイトルには特別の意味があるように思われる。なぜなら、ユダヤ教も「ナザレのイエス」と呼ぶからである。

- 2 **ナザレの会堂** イスラエルの北部地域をなすガリラヤ地方の小邑ナザレがイエスの故郷であるが、ここでふつうのユダヤ社会の一般風景、ことに我が国からは想像できないその濃厚な宗教性が示される。また、ナザレはイエスのたとえ話に出る空の鳥、野の花、農村、牧畜の原風景をなしている。その意味では聖書は環境的である。
- 3 **受胎告知** 神秘的場面であるが、「処女降誕の奇跡」というキリスト教信仰の根幹テーマの最初の一つがここで提示される。大多数の観賞者には少なくとも最初の驚きであろう。以下、次々と信仰のメッセージが続く。
- 4 **ヘロデの宮殿** 時代の政治背景が示される。しかも、ユダヤ王国は政治的至高ではなく、ローマ帝国の間接支配（プロテクトレイト 属州）を受けていた。この地方はことに複雑で、ローマ帝国、王国支配者、ユダヤ民衆の複雑な関係が暗示される。
- 5 **エリサベツ** 聖霊によつて身ごもることの不可思議とそれを喜びをもって受けとめる信仰的態度はイエスの物語にふさわしい。
- 6 **ヨセフの苦悩** 「ヨセフは正しい人であったので」（マタイ第一章）悩みは大きかったであろう。さすがに当初は離縁もありえたがヨセフは信仰によつてその悩みを解決した。まさに「正しい人」の解決である。
- 7 **婚宴** 結婚式であるが、集まった人々は来るべき神の子の誕生は知らない様子である。
- 8 **住民登録** 初代皇帝アウグストゥス（アウグスツス）の人口調査命令が出る。調査登録は本籍地においてとされ、ヨセフ夫妻はベツレヘムが本籍であった。というのも、ベツレヘムは首都エルサレムの南にある小さな町であるが、由緒深い「ダビデ」の町で、救い主（メシア）はダビデの子孫として生まれるとされていた。そしてヨセフ夫妻もダビデの一統であった。

*ローマ帝国はこの時初めて共和制から帝国となった。人口をはじめ、国勢の把握は今日も政治の基本である。ローマに支配され

ているユダヤのヘロデ大王は一応抵抗するが易々と従う。

9 東方の博士たち 三人の博士は英語では *magi* というが、「賢者」とも訳され、占星術をはじめ、諸学を修めている存在であった。イエスの誕生はヨセフ家の一小事件ではなく、人々が広く知る宇宙的できごとであった。

10 イエスの誕生 「クリスマス」というハイライトであるが、その意味は深い。神の子が貧しい一遇で生まれるということが、人間が最初に示した迎え方を象徴している。

11 羊飼いの狩猟、遊牧民の社会にとつては、羊は最もポピュラーな動物である。柔和であるが弱く、時には無知な存在として、養い保護する者が必要である。人とは「羊」であり、これを守り、育て導く者として「牧者」がいる。イエスは「人」の牧者である。「牧師」もそれから起こったことばである。

12 イエスの割礼 信仰と律法という重要テーマとして、まず律法が示される。「割礼」は、ユダヤ民族の証しであり、性の儀式として我が国の人々にはなじみがなく、驚きであるが、逆に「律法」とはどのようなものかの良き例である。

13 博士達の贈物 ここで初めて三人の博士は降誕の場を訪問する。近代に至るまで香料（スパイス）は東洋由来の貿易品であるが非常に高価であり、三人の博士の大きな喜びと感謝が表されている。

14 幼児殺害 ヘロデはイエスの来るべき権威を見通して暴挙に出た。支配者こそ民衆を恐れる存在だからである。また、ここで聖書の予言が成就し、イエス・キリストの誕生が予定されていたことが示される。神の導きにより、ヨセフ一家は難を逃れるが、イエスの誕生が当時も大事件であったことが示唆される。

15 ナザレの村 ヘロデが死に安全が回復し、一家は故郷ナザレへ戻る。ナザレの風景が美しく描かれ、イエスの少年時代が始まる。イエスの宣教活動の三年（公生涯）を除けば、幼年時代、少年時代の記録は皆無である。ふ

つうの人の少年時代とそれほど変わりはなかったであろう。

16 少年イエス 賢く聡明な少年イエスとして描かれている。神殿を訪れた折、供え物(羊)が描かれている。イエスはそれをじっと見ている。何も解説されないが、供え物は律法の基本であり、信仰と律法のかかわりという大きなテーマが暗示されている。もちろん、これは後の「宮清め」(Ⅱの8)の伏線である。また、ローマの兵士が掠奪する場面、それを「熱心党」が憤慨する場面、いずれも時代背景のみならず、イエスの宣教活動にとつても大きな意味のある要素である。

17 バプテスマのヨハネ 物語もいよいよ本格段階に入り、イエスの「神の国」メッセージの先駆が示される。「バプテスマのヨハネ」とは洗礼(バプテスマ)を授ける預言者ヨハネのことである。また、「ヨハネ」はユダヤのありふれた男子名である(英語ではJohn)。洗礼者ヨハネは「神の国は近づいた。悔い改めよ」と荒野に彼を求めて集まった民衆に呼びかけ、ヨルダン河の水で洗礼を施す。ヨハネは来るべきイエスの先駆(さががけ)であるが、このこと自体預言の成就である。またヨハネは、後にヘロデ(ヘロデ大王の子の一人で、ヘロデ・アンティパス)の非道を真向うから批難したことから、魔手が彼に近づく。

18 ヘロデとヘロデヤ ヘロデヤはヘロデの兄弟の妻であるのにヘロデと不義の結婚をしたため、バプテスマのヨハネはヘロデの結婚を痛烈に非難していた。ヘロデはこの批難を気に病んでいた。ひそかに心を寄せていたからである。

*ヘロデ大王の時代と異なりユダヤの反乱後王国は失われ、このヘロデはローマの一地方(ガリラヤ)の領主にすぎなくなっていた。ローマからは代理人として総督(ピラト)が派遣されていた。

19 ヨセフの死 人として神の子イエスの父となったヨセフの死。マリヤと比べて存在感が薄い、実直、誠実、

深い信仰の人であった。

20 **イエスのバプテスマ** イエスがその使命に召される偉大な「召命」の事件である。あまりのことにヨハネは洗礼の業を固辞するが、「今は受けさせていただきたい」とのイエスのことばにイエスに洗礼をさずける。イエスのこの受洗はメシア（救世主）としての自覚を示している。もつとも、聴衆の中には政治的関心を理由にした人々もいたであろう。このことは常にイエスを囲む人々や民衆の中心にあった。

21 **宣教を開始** 宣教を開始する。これをイエスの「公生涯」という。大工の子が賢いとはいえ神の子として宣教を始めたことに対し、民衆に驚嘆ととまどいが生じるが、次第にその教えは波紋を描くように拡がってゆく。

22 **カペナウム会堂** イエスが宣教活動を開始したのは、今日のイスラエルの北三分の一ほどのガリラヤ地方である。イスラエルは乾いた地で、数少ない湖の一つテベリア湖のほとりにある町カペナウムはナザレからも近く、イエスの最初の本格的な宣教の町であった。会堂はもちろん当時のユダヤ教の会堂である。ラビ（ユダヤ教の聖職者、「先生」くらの意味）の間に動揺が走る。

23 **漁師ペテロ** なじみの薄い人でもペテロは知っている名であろう。イエスの最も信頼し、後を託すことになるシモン・ペテロとの最初の出会。ペテロは名もないふつうの人で仕事は漁師であった。学問や知識はないが開かれた心と鋭い直観の人であり、イエスはペテロのその純粋さを心から愛した。そのペテロも最初はイエスを理解できず、時として反感さえ感じていた。

24 **ペテロの家** 当時のユダヤ社会では、イエスが家を訪ねるということは、その人を心に留める主要な存在であることを意味していた。

25 **取税人マタイ** ローマ帝国では取税人（貢取り）とは、異民族ローマに納付する税金を同胞から徴収するユ

ダヤ人の仕事で（間接統治）、権力を後にして相当部分を着服する実入りの多い人々であった。民衆から特別に嫌われさげすまれ、差別無視されていた。であるからこそ、イエスは取税人に心を深く留められ、その家を訪ねる。イエスの弟子たちといわれる人々は、予想以上にいろいろな人々から成っており、「選ばれた」という語感からは遠い。
*ローマ帝国では取税人たる地位は入札で決められたから、その様子は想像以上であった。

26 放蕩息子の話 キリスト教の悔改めと赦しと救いの教えが、これほどわかりやすく胸を打つように述べられる話は他にないであろう。この授業でも関心のトツプであり、信仰の話題として抜群である。父（神）、子（弟）二人である。ただし、兄（パリサイ人）としてよいかどうか。意外に同情も多い。いづれにせよ、失われた者が再び見出される喜び“はキリスト教が愛の宗教たるところであろう。（たとえ話）は求める者にはわかりやすくという意味で、むしろ隠すための話法といえる。

27 牢獄のヨハネ 意外にも、入獄の身であるバプテスマのヨハネに對面して、ヘロデは腰が低い。それはヘロデ自らヨハネに心を寄せていたからだ、むしろ時代状況として、ヘロデが民衆を恐れていたからに他ならない。

28 弟子になる その場で即座に弟子になりなさいと言い、身の上や家族や背景を聞かず、その身一つですぐに従っていくことを求められる。弟子以外にも多くの人々がイエスを囲みながら共に歩いて行く場面もこのことゆえであろう。この弟子集団は不思議な集団で、取税人、熱心党、裏切り者もおり、イエスが広く心を開いてた（別の意味では無防備）ことが示される。

29 ヤイロの娘 瀕死の病の癒しの奇跡である。“死んだ”とされているから、死人の復活の奇跡であろう。復活はキリスト教の中心テーマである。これもカペナウムの会堂で起こったことである。

30 サロメの踊り サロメはヘロデヤの娘である。踊りの褒美にバプテスマのヨハネの首をとるという要求にヘロデ

は窮地に陥る。気の弱さ、無原則、無定見が示され、これが後でも表れる。

31 ヨハネの死 バプテスマのヨハネは首をはねられた。

32 マグダラのマリヤ マグダラのマリヤの話である。マグダラは地名でテベリア湖畔にある。奔放な性格の女性で、イエスに救われ従う（この場面にはない）。十字架の場面、埋葬の場面、復活の場面に立ち会った重要人物。

*聖書には数は少ないが志の高い女性が、その実名と共に、出現する。

33 山上の説教Ⅰ 「山上の説教」のⅠである。かつては「垂訓」といわれた。常に自由で心が開かれており、優しく、平明で時宜にかなっていた。聴衆も青年層が多かった。

「明日の事を思いわずらうな、今日の苦労は今日にて足れり」

「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすればすべての必要なものは添えてあなた方に与えられるであろう」。

*安定収入というものの全くない時代、生きること頭がいっぱいのその日暮らしの時代であった。ややもすれば生活のために神を忘れる青年層にとっては良いメッセージである。

34 イスカリオテ・ユダ 後に裏切り者となるユダが弟子になりたいと言う。「ユダ」はありふれた男子の名だが、出身地のゆえに「イスカリオテのユダ」といわれる。ユダはイエスに自分を売り込むが、その売り込み方が、能力とか効果などいかにも現代的である。イエスはしばらく黙して語らず、最後に本当の意味で「良い実を結べ」と一言答える。

35 五千人の給食 食べるのが切実で、かつ大きな魅力だったことが背景にあるが、単においしいものをごちそうしたということではなく、神の名によって求めるものはすべて神が与えられるということを示すために、イエスは奇跡として五千人に食事を与えた。これも信仰の業は報われるということが成就するためである。

場面解説——パートII

1 パリサイ派の人々 聖書の内容が身近に感じられるための一つの条件はこの「律法の位置」にある。律法において人が熱心ということをきちんとして理解しないと、後の展開が空白になってしまう。

ふつうは「律法主義者」といわれ、イエス・キリストに敵対した。難しいことばだが、生活の中で文字通り徹底して律法（神から人に与えられた掟）を率先、実行した人々である。ユダヤ社会は今日我が国とは比べものにならないくらい宗教的社會であつたから、この徹底ぶりは偽善的といわれるほどであつた。律法はモーセの「十戒」がその最も重要なものだが、その数は膨大かつ細かさをきわめた。

安息日に水に落ちた子を助けてはいけないのか、などはイエスが律法主義者の形式主義ぶりを真向うから批判した例である。イエス・キリストが来られたのは律法を廃するためではなく、かえつて愛において真に実現するためであつた。

* 一般にはパリサイ人は民衆の間に広く信望を得ており、高潔な人々も多く聖書の読み方にも節度が必要である。

2 弟子の派遣 弟子はイエスに選ばれてイエスに従つた人々である。弟子になることは「決断」であつて、家族も財産も顧みることがあつてはならず、持ち物も衣服、履物以外は許されない。これは清貧の思想ではなく、山上の説教（Iの33）のまず率先ということができよう。

3 ヘロデの（を）襲撃 イエスに対し熱心党の動きを浮き彫りにするのはこの映画の特徴である。実際、イエスはこの動きを認めなかつたが、禁止したり、排除したわけではなく、熱心党は弟子の中にもいた。

4 ペテロの信仰告白

キリスト教にとって、偉大な決定的瞬間である。イエスが単に偉い人、預言者というのではなく、「神の子である」とことばで言い切る（告白する）感動の瞬間である。これ以降、このペテロは最後までイエスの告白した弟子であり、イエスの死後いつそうその信仰が深まるとともに、伝道の使命感も固くローマで殉教する最後までその使命に一生を捧げた。シエンキエヴィッチ『クオ・ヴァ・デイス』はその物語である。

*ペテロはパウロと並びキリスト教の成立にとつては最初で最大の功労者であり、歴代ローマ教皇の年代表はペテロを第一代とする。「岩」*petra*が暗喩（たとえ）としても用いられていることを取り上げるのは、受講者にとつて多少難しいかもしれない。

5 山上の説教Ⅱ

人の幸福は近代、現代におけるように何か外的なものの所有（財産、金銭、才能、名誉など）によるのではなく、その人の心のあり方による。「心の貧しい者は……」は、文字通り「心が貧しい」ことではない。

*幸福論は多い。同時代のセネカ『心の静けさについて』から、メーテルリンク『青い鳥』、ヒルティ『眠れぬ夜のために』などはすぐに思いつく。

6 ラザロの復活

死んでいたラザロが復活する。キリストの最大のテーマ「永遠の命」がこの奇跡によつて示される。すべての人が忌み嫌うもの、しかしすべての人々に必ず一回は訪れ絶対に避けることができないもの、それは「死」である。有名なキエルケゴールの『死に至る病』は「ラザロの復活」から筆を起こしている。

7 エルサレム入城

物語はいよいよ「受難」と「復活」の段階へ入る。イエスの宣教はガリラヤ（ナザレ、カペナウム、テベリア湖などの北部イスラエル地域）から始まり、そのメッセージは多くの人々を引きつけ、大きなうねりとなつていった。一方、エルサレムは首都で、宣教も新しい段階に入る。同時に、危険な敵対勢力の中心に乗り込む序曲であり、イエスは「神の子」としての任務を行う使命をもつてであった。ロバに乗つては、王者のように威風堂々とでなく、あくまで謙遜で柔和の象徴である。それは成就でもあった。ここで歓喜した民衆は後にイエ

スを十字架に付けよと叫んだ民衆でもある。

8 宮清め 神殿は神聖な場所（「神の家」）であるべきなのに、現実には支配階級の宗、教、商、売の場でもあり、醜く墜落した姿（「盗賊の巢」）を見せつけていた。イエスはこれに対して肅清の一撃を加えたが、この意味は大きい。パリサイ派、サドカイ派（神殿を根拠とする宗教勢力）にとつて、イエスは公然たる敵と見られることとなつたのである。後にイエスを裁いた大祭司カヤパの一族はこの神殿に利権の網を張っていた。

* 両替商は独占的な金融資本となつていた。過越しの祭りも近く、神殿には広い地域から多くの巡礼が来ていて、供げ物を現地通貨から両替して購入しなくてはならなかった。

9 神殿で教えるイエス 神殿においてイエスはさまざまなたとえ話をしたが、宣べ伝える神のことは、神殿に勢力を張る祭司階級、パリサイ派、サドカイ派にとつては、神学上も申し開きのできない非常に挑戦的な内容を持っていた。イエスを殺そうとする動きが高まつてくる。神殿は中心中の中心地であつたからなおさらである。

10 バラバ イエスには何の罪科（とが）もなかった。これはヘロデもローマ総督ピラトさえも知っていた。しかし、人は神の子をこの盗賊バラバと同列に罪に問うたのであり、人間の行うことの恐ろしさがここにある。

* 映画ではイエスとバラバとの出会いと語りの場を設定している。バラバについては、スウェーデンの作家、文学者ラーゲルクヴィストの『バラバ』があり、この作品でノーベル文学賞を受けている。

11 子供たちとイエス 単に子供のように素直になれというのではなく、大きな意味がある。

○・一五 「だれでも幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこにはいることは決してできない」（マルコ一

12 姦淫の女 「姦淫」は最も重大な倫理上の罪であり、「十戒」の第七として律法に定められ、その場で石で殺

されねばならないと定められていた。この刑は想像以上に残酷で（石は尖っており、死体は裂けてバラバラになる）、前記『バラバ』にはその描写が出てくる。しかし、イエスは、最初に石を投げる人はその罪を犯していないのみならず、たとえ内心でも非の打ちどころがない人であろう、として、偽善的律法主義者を退けた。「律法」は大切である。しかしそれは愛に裏打ちされていなければならない。この高貴な愛の律法の場面は誰にもわかりやすく、訴える力もことさらに強い。キリスト教的愛の真髄を語るに最適である。

13 百人隊長 兵士は支配者ローマ帝国の兵士であり、百卒長とは百人の兵士の隊長で権限も責任もあつた人々である。その国籍、身分、地位、職業にかかわらず、イエスのことばは人々の心に響いた。いずれは、キリスト教は全ローマ帝国を精神の力で呑み込むことになる。『クオ・ヴァーデイス』はその物語である。

14 盲人を癒す キリスト教は靈的な宗教であるが、人間は身体的存在も含めた全存在である。身体は人間性のまぎれない特質である。癒しの奇蹟はそれ自体が大切であつて、奇術とか何かの証拠として権威や関心のために行われるのではない。病める者に対する愛の業として、信仰によつてなされるものである。

15 混乱する神殿 事態は緊迫してくるが、イエスを捕えることは容易ではなかつた。イエスの語っていることは真実であり、権威と力強さにあふれ、民衆の中で高い人気があつた。パリサイ派の中でさえも、イエスを認める考えもあつた。

16 ニコデモ ニコデモもイエスの理解者の一人であつた。ニコデモは議会（サンヒドリン）においても力があつた。間に入つてとりなすがある限界を越えることはできなかった。もつとも、イエスの刑死の後、とむらいの儀式をしたのはせめてもの救いである。また、ヨハネによる福音書はイエスとニコデモの間の会話を詳しく記しており、ニコデモの志に一定の評価を与えている。

17 議会 当時のユダヤの議会は「サンヒドリン」といわれ、七一人で構成されてサドカイ派とバリサイ派が議員であった。昔より宗教上の権限があったが、次第に警察権、徴税権、民刑事の権限を持つようになった。ことに

大祭司カヤパの一族は利権を握り、神殿をめぐる経済的利益を支配していたといわれる。イエス、パウロ、ペテロ、初期の有力信徒ステパノなどがこのサンヒドリンで裁かれた。ただし、死刑はローマの総督に権限があった。

18 ユダの迷い ユダはイエスをユダヤ当局に売った裏切り者である。ユダが事前に深く悩んだという記述は聖書になく、その動機は謎である。イエスの逮捕を協議するために出かけたことを、「ユダにサタン（悪魔）が入った」としている。

19 過越しの夜 有名な「最後の晩餐」である。「過越し」とは パスオーバー *pass-over*（通り過ぎること）であって、ユダヤの大祭の一つである。ユダヤ民族のエジプト時代に神の怒りの審判が民族の家々だけは通り過ぎ、民族が保持された歴史を記念し神に感謝することを指し、自由と救いと復興を神の恵みとして感謝する意義がある。イエスと十二人の弟子たちとの最後の食事はこの記念すべき意義深い過越しの日であった。ここではパンが割かれ、ぶどう酒が注がれる。キリスト教徒は今でもこの「聖餐」の場で主イエスに会っていると感じる。しかし、ユダの裏切りがここで露見すると同時に、イエスも身近に迫った自らの死と使命とを一同の前に明らかにする。

*レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」に見られる整然とした食卓の設定はダ・ヴィンチの巧みな創作であり、実際はこの映画作品に見るように机も椅子もなく、床に横になりながらであった。

20 ゲッセマネ オリブ山のふもとにあり、イエスが好んだ場所である。ここでの祈りは文字通り血の出るような最後の祈りである。イエスの「受難」を パッション *passion*（本義は情熱）というが、人への愛をこめてすべてを尽くしての父なる神への祈りも、イエスも地上においては「人」であったがゆえに想像を絶する苦悩であった。対照的に、弟

子たちは居眠りをしていた。それは「人の気も知らないで」という生やさしいものではない。なぜなら、イエスの苦しみは私たち人間の罪の故だったからである。

*ゲッセマネはエルサレム旧市から谷一つへだてた高台にあり、エルサレム全体を一望におさめることができる。

21 裏切り ユダの裏切り行為は最高潮に達し、イエスに対するキスで追手に合図する。キスは本来親愛の表現である。彼もイエスのためにすべてを捨てて従ったことはまぎれもない。素質には恵まれていた。「イスカリオテの」を熱心党と結びつける解釈もあつて、ユダに政治的フィクサーになろうとする意図があつたようであるが、中には到底推し量ることができない不思議、不可解がある。使徒言行録は、神学的にもユダは必要な人物であつたとし、パスカルも「イエスはユダの中に愛する神の命令を見た。彼を友よと呼んだから」(『パンセ』)としている。後に、ユダは悔恨のあまり自殺したが、使徒言行録はユダの事故死としている。

イエスは無抵抗であつた。味方が剣で応じた行為に対し、「剣を取る者は剣にて亡ぶ」と諫めた。これは単なる平和主義の行為ではない。イエスにとつてすべてこうならねばならない聖書の言葉の成就であるとはいえ、あまりに人間的思いから宿命論的な芝居があつた解説はふさわしくない。

22 夜の裁判 サンヒドリンのメンバーによる宗教裁判である。夜の議会召集は非合法、非正統であつたが、彼らは大変追い込まれていたのである。多くの偽証が行われたが、事実の裏付けはなかった。聖書(マタイ)は二人の証言を記しているが、二人の証言者ともイエスの発言(たとえ話)の意味を全く理解できていなかった。というより理解しようとはしていなかった。謎を文字通り反対にとつてしまったのである。弁護人もなく、要するに法による殺人であつた。

23 ペテロの否認 有名な場面。「鶏の三度鳴く時」とピタリ予言までされている。どのような強い決心の人間も

本当の時は弱く、偽りや裏切りに心が揺れることを示すリアルな場面である。にもかかわらず、イエスはペテロの弱さと慌て者ぶりを少しも難詰せず許す深い愛を示す。ペテロは深く悔いる。人間的次元では、これでかえってペテロという人間像を好きになる人は多いだろう。しかし、ここに及んでペテロの心を見通し、その弱さを思いやり許したイエスの愛の大きさと深さは、ほとんど人の想像、思いを越えている。

24 総督ピラト　ピラト（ラテン名Ⅱピラトウス）はローマから派遣されていた総督。すでにユダヤは初代ローマ皇帝アウグストゥスのもとで独立を失っており、重大犯人の死刑執行権はなかった。そのピラトがイエスに死刑を執行したのであり、これによってピラトは歴史上最も不名誉な汚名を残すことになった。それだけではない。ピラトは政治家であり、若干の分別と知識は持っていたから多少の理性があれば、イエスが無実であり目の被告人がデッチ上げであることはわかっていた。「真理とは何か」とイエスにたずねる問（実は愚問）を発するスマートさはあった。しかし、彼は自分が可愛いが故に民衆を恐れた。その結果、自らの意志に反して全く罪のない者に死刑を宣告することに追い込まれたのである。

ピラトは現代人の典型である。教育によって「真理」につき聞き及んでおり、それが良いもの大切であることは知っている。ただし、それは自然の「風景」にすぎず基本的には「他人事ひとこと」である。それを押し通す力はもとより情熱もない。「真理とは何か」（*Quod est veritas?*）も自ら答えを出すべきで、他人に答えを求める性質の問いではない。問いの形をとった自己弁解であった。イエスにとつては「答えない」が最も適切な正解であった。

25 ピラトとイエス　ピラトはイエスに対し上から目線で、口実として何とかイエスを救える言質を取ろうと懸命になっている。それはピラトが真理に対し忠実であったからでは少しもなく、それによって自分がこのやっかいなユダヤ人の騒ぎから逃れたい自己保身からであった。神の計画のもとでは救われるべきはむしろピラト以下すべ

ての人間であつて、ことからの真実は全く逆の構図にある。

26 鞭打ち この鞭はふつうのものではない。太くしかも細かい鋭い凹凸でおおわれており、衝撃力で肉がはがれ、その苦痛は人をして気絶させるほど——さらにいうなら、そのほうが却つて苦痛が感じられなくなる——残酷なものであつた。しかし、聖書にあるように、「その御傷^{みきず}によつて、我々は(罪から)癒^{なす}はる」(With his stripes, we are healed)。

27 民衆の声 もちろんすべての民衆が反イエスであつたわけではない。しかし、当局によつて一部がそのかされていたのを十分知つていてそれを拱手傍観していたのだから、大差はないであらう。

*これは民衆に対する単なる非難と解すべきではない。その是非はともかく、民衆のこのような性格を客観的に見た政治の科学の始まりはマキャベリであるが、それはとりもなおさず、現代人に他ならない。

28 ヴィア・ドロロサ 「ヴィア・ドロロサ」(Via dolorosa)は「悲しみの道」の意味で、現在もエルサレム旧市内に残されている。十字架による刑は極刑であるばかりでなく、古来より律法にもあり、「最も呪われた刑」であつた。それは人の身長よりはるかに長く大きくしかも重い。また自らがそれを運ぶルールがあり、周囲もあまりの苛酷さに正視できないほどであつた。心を痛めて代わりにこれを助ける人(クレネのシモン)がいたことを聖書は記録している。

*別の映画作品では、重い十字架がヴィア・ドロロサの敷石の石だたみの上を引かれて「カタタ・…」という音を立てるのを聞こえさせる場面があり、我が国の映画評論家淀川長治をして最も感動的場面と言わしめていた。

29 ゴルゴタの丘 国家権力、人民、宗教がすべて結合してイエスを無き者にした。このことは最も大切なことではない。イエスはすべての人の罪を負い、自由の意思によつて死を遂げたのである。「ゴルゴタ」は「頭がい骨

(どくろ)」を意味する。現在はエルサレム旧市内北側の「ダマスカス門」を出た位置にあり、門のほぼ正面小高い丘がどくろに見たてられている。当時のものであるかは全く定かではない。

イエスの十字架上の死刑は、ピラトの総督時代AD二六―三六のどこかであるから(復活後のステパノの殉教からほぼ特定されている)、三〇年ころと特定されていて、したがって今からほぼ二千年前である。ゴルゴタで起こったことは今の今、ここにおいてもなお同じだけの意味をそのまま持ち続けている。いささかでも自分にとって意味がありとするのがキリスト教信仰である。

30 遺体 マタイ二七章は遺体を納めた墓はピラトの命令によって「イエスの復活」を牽制するために封印のうえ、三日間番人がおかれたとしている。

31 復活の朝 遺体のないことの発見は安息日があけた日の朝のことであつた。歴史の中で最も力強く最も卓越した、最も感謝すべきできごとの瞬間である。イエスの遺体が十字架から下されたとき、これを終極でないと思つた人はいなかつたであらう。しかし、実際のところ、終極ではなかつたのである。

「あなたが十字架におかかりになつたイエスを捜していることは、わたしにはわかつているが、もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、甦られたのである」(主の御使)。

キリストが死人の中より甦られたことを、最大の奇跡として文字通り信じるのがキリスト教信仰の始まりである。

* 「甦り」は文字通り「更に」「生きる」ことである。

32 マリヤの証言 マリヤの証言は誰もほとんど信じなかつた。ペテロの心を打つ告白を除けば弟子でさえ信じにくかつた。常識的には信じられないのが当然で、彼らを糾弾することはできない。しかし事実は全く逆で、神の摂理は人には測り難く、信じた人がいたところから人類の歴史は変わり、新しい歴史が進行した。ヘブル人への手

紙十章のごとく不思議という他なく、この非科学的事実を信じる人がいることこそ今も奇跡ではなからうか。

33 大宣教命令 復活のイエスは再び言われる。ここは記しておこう（マタイ二八・一八―二〇）。

「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」

34 エンディング イエスが言われた「すべてが終、わつた」ですべてが整った。したがって、ここから人の救いのプログラム「すべてが始まる」のである。この「終わり」と「始まり」の対比について、それぞれ、受講者に意味を尋ねてみた。思い思いの答えが戻ってきたが、ほとんど皆が一致していた。どう一致していたか、それをあらためて言う必要はあるまい。私の企図は概ね成功であった。（了）

科目試験から見る本学の課題

『ナザレのイエス』についての私の目論見は成功であった。しかし、科目試験を実施しなくてはならず困難を感じた。そもそも内容の構想から試験にふさわしい科目かどうか迷うところがあった。『ナザレのイエス』の数回の鑑賞後、以後のほんの断片的世界史的知識を解説して終わったが、次のような課題で、解説の非力から来る不十分もあって、履修者の歴史の成績は不十分であった。

① 「信仰による義認」の理解は困難

聖書自体の（学生）の読解が十分でないとキリスト教（プロテスタンティズム）の歴史の理解も十全を期し難い。超難解な Jargon^{ジャゴン}の羅列になってしまう。その意味では、たとえ映像であろうと、聖書の映画はリアリティーの会得には多少は有益かもしれない。通俗的には「信仰」は「行為」にも表れるから、信仰と行為の弁別は未入信者には存外にハードルが高い。ただ、映像による人の表情はより内心の靈性を指向する傾向があることは確かである。

② 「律法」のポジティブな面

未入信者には「律法」の意味内容は敷居が高い。パリサイ主義 \parallel 悪と一刀両断にすると、瑣末な悪性形式主義という性格づけは避けることができない。むしろ「律法主義者」という着地点を考えるより、スタートでは、律法 \parallel 善としないと、イエスの真の愛がわからない。この点は、セシル・デミル監督の映画『十戒』を若干併用することで、受講者には、律法の人間にとつて意味を『ナザレのイエス』につなげることができた。

③ プロテスタンティズム濡れ衣問題

プロテスタンティズムの中のピューリタニズムの再位置づけが必要である。世俗世界で通俗化されたウェーバーの「プロ倫」教説を放置することは今後ますます問題である。むしろ、暴論かも知れないが、ドイツ農民戦争への非難に見るような、政治性を一定限界で拒否したルターの非政治主義（という政治主義）は再評価すべきではなからうか。カルヴァン高、ルター低では世俗社会科学に巻き込まれる懸念を感じる。

④ 「フランス革命」至上主義

近代史におけるフランス革命の理解は、啓蒙主義（概ね百科全書派）に対する哲学的批判の不十分のため、キリスト教界でも概ね放置されている。その反映で我が国の知識人には、近代におけるフランス革命の不釣り合い

な突出的評価が見られる。

⑤ イギリス革命のわかりにくさ

三一三年のコンスタチヌス勅令（ミラノ勅令）は信仰が国家の側に就くというその後の問題性を留意し、イギリス国教会のように、信仰が信仰を罰する——我が国のような非キリスト教の国民にとつては——面喰らう異例の事態を招いた。信仰の敵対者は無神論ではなく身内の他宗派であるという構図は、革命の理念構造をかなりわかりにくくしている。これから、前項（④）の事情ももたらされる。イギリス革命の根本的思想課題として、自然権、抵抗権をどう考えるかが出てくる。これらは、キケロなど、古代ストア主義に淵源するが故に必ずしも全的にキリスト的とはいえず、やはり、多少無理をして繰り出したという感なきにしもあらずで、本当のところ、元祖ロック、ホッブズの真意がいずこにありや、ではないだろうか。思想史的再検討は我が聖学院の理念にかかわる。

参考文献について

大多数の受講学生は信者でないから神学的内容は難解であり、かつ信仰内容に学問的諸説があるとの理解はかえってそれらの人々には躓きの元になるだろう。やはり、平易、素朴な信仰についての語りでよく、参考文献も牧会者の著作や信仰告白を挙げる。キリスト教史も教義史のようなものは他に講義もあり、世界史や多少詳しい哲学史（例として、ヴィンデルバント）で十分である。

というのも、私事にわたるが、筆者は戦中幼少の時期より熊野義孝先生の教会（武蔵野教会）で養われ、ならん

で、少年、青年時代は竹森満佐一、松永希久夫先生の説教も聞く機会がしばしばあった。ことに、熊野先生の説教は不思議中の不思議で、大神学者を微塵も感じさせず平易で肩の力の抜けた、禅問答のような語り方でスツと終わり、後からあれは何だったのかと考えてしまうことしばしばであった。にもかかわらず、今何十年と蓄積すると、意識せずに純福音的考え方が私の存在に完全に浸透していると感じる。実際、先生が我が国のバルト神学の泰斗であったことはうかつにも後で知ったのであるが、それもそのはず、説教の中で「神学」とか「バルト」という名辞はほとんど出ない。「社会科学」などもつてのほかである。自然に、教会は牧会第一であるべきで、神学は平信徒にとつては牧会者の背後のもの、間接的でよいという位置づけを行っている自分を見出す。

もちろん、これは神学は筆者に無縁というのではない。父は神田の古書籍商で熊野先生に代わって当時入手困難だった神学書を探し出したりしていた。和書の神学書も我が家を埋め尽くしていた感があり、桑田秀延『我れ信ず』（一九三六）の初版本など今でも父より受け継いでいる。ただ、私が研究者の職であるからか、神「学」と信仰はどういう関係かは難しく、聖書を研究して脱聖書、脱キリストした不幸な神学者がいけないわけではない。接し方によつては、信仰者に神学は最も危険な学である。熊野義孝『基督教概論』（一九三三）によれば、どのように聖書を解釈するか、いまやさまざまに解釈しうるということ自体、つまり近代における自由の拡大自体、神学の研究対象であるが、逆にそれが諸神学の鼎立の背景になっている。これらの深い事情については、是非とも大木英夫先生の著作に拠るべきと考えている。

J・S・スチュアート、椿憲一郎訳『受肉者イエス』新教出版社、二〇〇四年

G・ボルンカム、善野碩之助訳『ナザレのイエス』新教出版社、一九六一年

- 松永希久夫 『歴史の中のイエス像』(NHK市民大学)、日本放送出版協会、一九八七年
- P・ラーゲルクヴィスト、尾崎義訳『バラバ』岩波書店、岩波現代叢書、一九五三年
- 岩田靖夫 『ヨーロッパ思想入門』岩波書店、二〇〇三年
- 服部英次郎編 『キリスト教会とイスラム』(『思想の歴史』3) 平凡社、一九六五年
- G・ラートブルッフ、田中耕太郎訳 『法哲学』(『ラートブルッフ著作集』1)、東京大学出版会、一九六一年
- 田中浩 『ヨーロッパ知の巨人たち』日本放送出版協会、二〇〇六年
- W・ヴィンデルバント、速水敬二ほか訳 『哲学概論』(第1・2部) 岩波書店、一九三六年
- K・バルト、桑田秀延訳 『我れ信ず』基督教思想叢書刊行会、一九三六年
- 熊野義孝 『終末論と歴史哲学』新生堂、一九三三年
- 熊野義孝 『基督教概論』新教出版社、一九四七年
- 大木英夫 『バルト』講談社、一九八四年
- 竹森満佐一訳 『ハイデルベルク信仰問答』新教出版社、一九四九年
- G・克蘭フィールド、関川泰寛訳 『使徒信条講解』新教出版社、一九九五年
- 永井修 『改革教会信仰告白要覧』全国連合長老会出版委員会、一九九九年
- Cicero (translated: W. Miller), *De Officiis*, Loeb Classical Library, 1913